30E13-am02

名古屋大学医学部附属病院における薬学部学生の長期実務実習カリキュラムの見直し

○日比　陽子[1], 葛谷　孝文[1], 重野　克郎[2], 椿井　朋[3], 野田　幸裕[4], 山田　清文[1]
（[1]名古屋大病院薬, [2]愛知学院大薬, [3]金城学院大薬, [4]名城大薬）

【目的】長期実務実習において、名大病院は昨年度に引き続き平成 23 年度も近隣 3 大学から年間 3 期で合計 60 名の実習生を受け入れている。今年度は昨年度の実習の結果を踏まえ、実習スケジュールの変更や新たな試みを行ったので報告する。また今後の実習生指導を効果的に行うため、実習終了時のアンケートの中で薬剤師と実習生の双方に対し、実習前に学んでおくべきと思ったことについての調査も行ったので報告する。

【方法】昨年度は 5～11 週目に行っていた病棟実習の長期化を行い、2～11 週目は午前中に 5 人単位で薬剤部での実習、午後は各病棟に 1 人ずつ実習生を配属して病棟担当薬剤師が実習指導を行った。病棟実習前に、電子カルテの使用法、SOAP 記載法、持参薬記録の記載法などの基本的な項目を指導する事前講義を行った。病棟実習の総括や情報共有を目的として 2 回（8, 11 週目）の報告会を設けた。また昨年度から継続している薬剤師外来実習の他に、救急蘇生法や生体情報モニターの見方を学ぶ実習や、遺伝子解析と薬物治療の関連性について学ぶ実習を行った。実習終了後に薬剤師と実習生に対してアンケートを行った。

【結果と考察】病棟実習の長期化により、患者の入院時から退院まで長期にわたり治療に深く関わる事ができるようになった。報告会は実習生の意欲の向上や学習効率を上げる効果があった。薬剤師外来実習では 90%以上の実習生が「今後の学習に役立つと思う」と回答した。一方、病棟実習事前講義は病棟薬剤師にとって指導の負担を軽くする効果があった。また、実習生が事前に学んでおくべきだったと回答した項目は、薬剤名（商品名）が最も多かった他、薬理学、浸透圧の計算法など輸液に関すること、薬物動態学など基礎的なものが多かった。